

平成 27 年度 福岡女子大学 推薦入試

〔 A 日程試験問題 〕

国際教養学科

小論文

【 90 分 】

**注意事項**

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は 4 ページから 11 ページにあります。問題は全部で **1 題** です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 4 試験開始と同時に解答用紙の**受験番号欄に受験番号**を記入してください。
- 5 試験終了後、**問題冊子は持ち帰ってください**。

問題 次の文章を読んで、以下の問一・問二について解答用紙に記述しなさい。

三浦展によれば、渋谷のファッションビル「109」通称マルキュウが、「ものすごい状況になっている」という。地下二階から地上六階まで全館が完全に、女子高生、コギャル向けのファッション店だけで埋め尽くされている。そこに定番ファッションのコギャルたちがつめかけ、カリスマ店員とやらが身を以て示す新しいスタイル、ちよつと違うスタイルを構成する商品を争うように「ゲット」していく。（ということを三浦が朝日新聞のコラムに書くことは、彼らの自己を拡大させてやることになる。自分達が話題になり新聞や雑誌にとりあげられることは、マスメディアが彼らの広告メディアになることなのである。）

で、コギャルたちは、ゲットした商品で自分の外見を造り上げる。つまり自分（たち）のアイデンティティを視覚化する。そして「流れに乗った自分（たち）」を互いに確認しあい、周囲の人間たちに見せつける。その時、コギャルたちのアイデンティティは「109」に溢れかえる商品と切っても切れないものになっている。むしろコギャルだけでなく、男の子たちも事情は一緒だ。彼らのアイデンティティも彼らの外見を構成する商品と一体化している。

そしていうまでもなく、若者たちは単なる典型例に過ぎないのである。そうした様相はわれわれ現代人のすべてに広がっている。われわれは、自分の外見や自分の生活空間である家や部屋を構成する商品を選択し購入し身につけて、あるいは所有して、それを他に示すことによって自分のアイデンティティを確認している。「鏡よ鏡」に結びつけていえば、〈周りの人たちという鏡〉に映す自分の姿を、そうやって造りあげ〈鏡〉に映して確認する。

たとえばあのバブル期、バブル成金たちは「自分とはなにか」を（他人という鏡）の羨望の眼差しによって確認し、さらに自己拡大の満足感を味わうために、ポルシェやベントを買ひ、チバリーヒルズ（千葉県土気に東急不動産が造成した高級郊外住宅地）の十億円建売り住宅を買った。「馬子にも衣装」という古来の諺を、彼らは争うように実践したのだ。むろん彼らは典型例に過ぎない。われわれすべてが多少の差はあれ、各種商品によって、他に見せる自己のアイデンティティを造り上げているのである。

アイデンティティ [Identity]。企業や組織の職員が胸にぶら下げているIDカードのIDである。意味は「身分証明」だが、ここでとりあげるアイデンティティ、正確にいえばセルフ・アイデンティティ [self identity] は、通常「自己同一性」と訳されるものだ。要するに「自分が自分であること」を言う。「自分探し」が探す自分像のことだといってもいい。

アイデンティティという言葉がそのような意味を持ったのは、一九六〇年代にエリック・エリクソンが「アイデンティティの危機」を訴えて以来のことだ。それまではIDカードが示すような意味でしかなかった。昔は「アイデンティティの危機」などなかったからだ。思春期や青春期の若者が「自分」について思い悩むことは昔からだが、「自分とは何か」と悩むことなど、哲学志望でもなければすることはなかった。「自分とは何か」という問いが重さを増したのは、豊かな社会が到来したためである。当時、アメリカは人類史上類を見ない経済的繁栄の中にあり、「誰でもなりたいものになれる」というアメリカンドリームが次々実現していた。「なりたいものになること」は若者たちの現実的なテーマになった。豊かな社会の中で自由を謳歌する若者たちの「なりたいものとしての自分」探しが始った。一

方その頃、ベトナム戦争への徴兵という恐怖が若者たちを襲っていた。若者たちは、それまで信じて疑わなかった「自由の国アメリカ」への信頼を失っていった。そして単純に「アイデンティティ・カタログ」の中から自分の生き方、人生を選択するという行為に疑問を感じていった。そして「社会の中のあるべき自分像」が見つからなくなり「アイデンティティの危機」に襲われるようになっていった。

エリクソン同様、ナチスドイツからアメリカに脱出したエーリッヒ・フロムは、ナチズムに巻き込まれる人間心理を追求した著書『自由からの逃走』で言っている。「近代のヨーロッパ及びアメリカの歴史は、人々を縛り付けていた政治的・経済的・精神的な伽から自由になろうとする努力に集中されている」と。そして「近代人は、個人に安定を与えると同時に彼を束縛していた前個人的社会の絆からは自由になったが、個人的自我の実現：個人としての積極的な意味における自由はまだ獲得していない。自由は、近代人に独立と合理性を与えたが、一方個人を孤独に陥れ：個人を不安な無力なものにした。：彼は自由の重荷から逃れて新しい依存と従属を求めるか、あるいは人間の独自性と個性に基づいた積極的な自由の完全な実現に進むかの二者択一を迫られる」と。そしてアメリカの若者たちが示したのは、その二者択一の難しさだったのだ。そして周知のとおり、フロムが考察した時代相がすっかり変った今も、われわれ現代人は、同じ二者択一を迫られているのである。

フロムが言うとおり、「アイデンティティ」の危機を感じ、自分探しに必死になるのは、伝統的社会で人間を束縛していた掟とセットになった人間の絆から解放された結果だった。いわゆる「個」が原則的に自由になった結果だった。それまで、人間の歴史のほとんどの間、「個」は、生まれや育ちによって、それぞれの社会の掟に縛られていた。親の

人種、階級、宗教戒律、性役割などに縛られ、同時に守られていた。八百屋の子は八百屋、職人の子は職人、武士の子は武士、足軽の子は足軽、家老の子は家老だった。「自分とは何か」は生まれた時に決まっていた。

近代に入ると、フロムのいうとおり前近代的社会の枷を外し「自由」になるための戦いが激化していった。フランス革命、アメリカ独立戦争、そしてロシア革命。どの革命も、抑圧された集団が、抑圧する集団に対して立ち上がった戦いだった。二〇世紀に入ると、ブルジョア対プロレタリアートといった一九世紀以来の対立の図式が、黒人対白人、女性対男性、体制社会対学生、宗教対宗教、というように人間社会のあらゆる側面に拡大していった。一言でいえば、抑圧を感じる人間たちが、それぞれの集団毎に、その自由を抑圧する社会や制度に挑み掛かる「自由のための戦い」を戦ってきたのである。黒人解放運動も、女性解放運動もそうだ、六〇年代末の学生反乱もそうだった。そしてそれら「自由のための戦い」はすべて「個としての自由」を求める戦いだったのだ。

一九六〇年代の日本は、若者たちが故郷を捨てて東京や大阪といった大都市に集まり始め、地方が過疎化していく時代だった。最初は団塊世代の兄弟世代が大都市に出てきた。続いて団塊世代が大都市にやってきた。巨大化する都市に集まる、故郷を捨てた若者の大集団。その多くは大学生になるために集まってきた人間たちだった。

そして大学生になった彼ら団塊の世代が「個としての自由」を求めて立ち上がったのが全共闘運動だった。全共闘運動は日本だけの運動ではなかった。第二次世界大戦から帰還した兵士たちが、故郷で待っていた妻や恋人と愛しい生まれた子どもたち、ベビーブーマー。彼らが大战後の経済的繁栄の中で、「個としての自由」を求め「全共闘」して戦う戦いは、世界中で爆発していった。世界中で「個」が解放され、「自由」になっていった。

だが、人類史上例を見ない巨大都市の中で「自由になった個」たちが得たものは、フロムの言うとおりの「孤独と不安と無力感」だった。既成社会が用意した「なりたいたいものカタログ」も機能不全に陥り、「なりたいたいものになること」は宙吊りにされたままになった。

そして巨大都市は、なりたいたいものが何なのかさえわからない、孤独と不安と無力感を抱えた「個」たちがバラバラに浮遊する世界になった。そこで「個」たちは、さらなる「自由」を求める心と「自由」を怖れる心を二つ抱えて生きることになった。若い「個」たちにとつての前者は生産社会に強く残る縦型の抑圧からの「脱出願望」になり、後者は、全共闘運動を共に戦い、共通の価値観、美意識を持つ「同世代という集団」への帰属願望として現れるようになった。そして生産社会と消費社会が二分化していく流れの中で、団塊世代による「同世代集団」は超巨大な消費者集団として世に現れた。生産社会はその消費社会に向けて、新しい生き方、新しい生活を構成する新しい商品を次から次へと生産し、情報化していった。そして新しい消費社会人たちは、次々出現する自分たちに向けた商品を争うように購入し、それらの商品によって自分たちの外見や生活スタイルを造り続けるようになった。そしてそのパターンが、その後今日まで、団塊ジュニア世代や茶髪世代にまで、受け継がれてきたのである。

(佐野山寛太『現代広告の読み方』より)

問一 傍線部Ⅰ「そうした様相はわれわれ現代人のすべてに広がっている」について、どうしてそのようになったのか。本文の内容に即して四〇〇字以内で説明しなさい。

問二 本文は二〇世紀末の文章である。傍線部Ⅱの状況は、二一世紀の現在において、どのようになっているとあなたは考えるか。具体的な例を交えて四〇〇字以内で論じなさい。





【問二 下書き用】


※二五字×一六行

平成 27 年度推薦入試 A 日程の試験問題について、下記の誤りがありました。ここにお詫  
び申し上げますとともに訂正いたします。

なお、当該箇所は試験の解答には影響しない誤植であることを申し添えます。

- 推薦入試 A 日程（平成 26 年 11 月 15 日実施） 国際教養学科の試験問題（小論文）  
【6 ページの 7 行目及び 7 ページの 3 行目】

（誤）「伽」 → （正）「枷」

<お問い合わせ先>

福岡女子大学

入試・広報・キャリア支援センター